



母校の上野小の中庭を彩る「縄文の炎」(H17)



薬院大通駅にある約6mの大作「Peace」(H17)



26歳の時制作した直方市の「三羽の鳥」(S40)

故郷を支えに自分らしく挑み続ける

「朝鮮半島から海を渡った陶工が上野で見事花を咲かせたように、私も海を渡り、同じような体験をすることになった」。

上野焼の先人たちに導かれるように高鶴さんがたどり着いたのは、ボストン郊外の街「トップスフィールド」。日本語に直訳すると、そこは偶然にも「上の野原」上野」でした。

「伝承とは、受け取ったものをそのまま次に引き継ぐことではありません。受け取った台木に新しい接ぎ木をして、21世紀の上野焼を作ることが、自分の使命だと思っています」と語る

上野焼の窯元に生まれ、26歳で独立した高鶴元さん。徹底的な研究と発想で、若くして日本の陶芸界に名を馳せました。新聞、テレビなどに多数取り上げられていた高鶴さんですが、昭和55年、それまでの地位や名声を捨てて渡米。現在はボストンを拠点とし、世界的に創作活動を展開しています。

古上野の陶片に導かれ

「上野が私の原点。母なる福智山と彦山川を思うと、どこに行っても負けないような気がするんです」。上野で育ち、現在はアメリカ永住権を取得している陶芸家・高鶴元さん。上野を離れ、47年経った今も、故郷への強い思いを持っています。

制約の中でできることを考える。

ピンチは飛躍のチャンスなんです。

クリエイティブリスト 高鶴元さん



▶昭和13年に上野で生まれ、昭和40年、久山町に築窯し独立。昭和43年から日本伝統工芸展日本工芸会会長賞を2年連続受賞ほか入選多数。昭和55年にハーバード大学に招かれ渡米。ボストン在住。



「独立し久山で個展を開いたんですが、

8百人に招待状を出し、来てくれたのは3日間で2人だけ…世間の風の冷たさを実感しました。どうかしなければと悩んだ時にヒントとなったのが、子どもの頃「釜ノ口窯」の跡地で何気なく拾っていた『古上野』の陶器の破片でした。そこから高鶴さんの、自身のルーツを探る研究が始まりました。まだ誰も窯跡や陶片に注目していない時代、県の許可をとり、週に1、2回発掘調査へ。約10年間かけて11万点を超える量の陶片を集めました。高鶴さんはこれら一つひとつを徹底的に研究し復元。古い陶片に教えられ、まるで4百年以上前の陶工の魂が、高鶴さんに作品を生み出させているように感じたといいます。

高鶴さんは29歳という史上最年少で日本伝統工芸展の最高賞を2年連続受賞。異例のスピードで日本の陶芸界に名を馳せていきました。



逆境の中での革新

昭和55年、41歳の時に高鶴さんはハーバード大学に客員研究員として招かれ、創作の場をアメリカに移しました。しかし日本とは違う制約があり、高鶴さんがこだわってきた薪窯が使えず、さらに窯が変われば今までの植物を使った釉薬も合わなくなっていました。

「制約があるなら、その制約の中で最大限できることを考えればいい。できんと諦めればそれで終わりです。同じことを続けていても衰退するだけ。人は変わり続けなければいけないし、ピンチは人を飛躍させるチャンスです」と高鶴さん。逆境の中で鉱物を取り入れた釉薬を考え出し、その鮮やかな色彩が定着していきました。



屋外に設置されたオブジェと自然の緑が調和した久山町猪野のスタジオ。山に見守られて育った高鶴さんは「稜線が福智に似ているから」と47年前にこの場所を選びました。自然の木や岩をそのまま映したパブリックアートは、現在、県内を中心に25か所以上の場を彩り、人の心に癒しを与えています。



特集◎ 福智人 ふくちのみと【完】